

長崎大学大学院腫瘍外科

村岡昌司, 赤嶺晋治, 田川 努
永安 武, 糸柳則昭, 岡 忠之
長崎大学医学部保健学科 田川 泰

【目的】肺癌術後の急性間質性肺炎(AIP)について検討。【対象】肺癌切除727例のうち術後AIPと診断された15例。【結果】12例が術前合併症(重複癌4, 心合併症4, 他)を有し, 2例が放射線治療, 1例は化学療法後。原発肺葉は全例右側で上葉切5, 下葉切5, 2葉切2, 全摘3例。術式変更, 血管損傷など術中偶発症が5例で, 平均手術時間345分, 出血量1403g。AIPの発症は術後3日以内9, 4~5日3, 6~7日3例と全例1週間以内で, 対側発症11, 同側2, 両側2例。発症後のLDHの最高値は死亡例(917±373)が救命例(414±188)より有意に高値。13例にステロイドパルス療法, 2例にPCPSを施行。15例中9例(60%)が死亡した。【結語】肺癌術後のAIPは, 右肺切除後1週間以内に発症し死亡率は60%で, パルス療法無効でLDH高値な症例は予後不良。術前合併症有する症例への過大侵襲に十分注意すべきである。

72. 肺癌術後血栓塞栓症予防目的のヘパリン使用例の検討
佐世保市立総合病院外科

近藤正道, 南 寛行, 児玉英之
宮崎拓郎, 國崎真己, 角田順久
吉田一也, 原 信介, 石川 啓

【目的】肺癌術後血栓塞栓症の予防を目的として, 高リスク症例にヘパリンを使用した。【対象】平成14年1月から平成15年3月までに当科で施行した肺癌手術71症例のうち, 術後ヘパリン使用群は16例(22.5%)で, 未使用群55例と臨床的に比較検討した。【結果】性別, 術式, 病理学的病期, ドレーン留置期間, 総排液量, 術後在院期間には両群間で有意差はなかった。ヘパリン使用の16例中4例(25%)で術後に輸血を必要とし, ヘパリン未使用群の5.5%より有意に高かった。ヘパリン未使用群の1例に肺血栓塞栓症疑診例が発生した。【まとめ】術後ヘパリン投与の有効性は示唆されたが, 後出血のコントロールを慎重に行う必要がある。

73. 肺癌手術の周術期管理の標準化をめざして

佐賀県立病院好生館呼吸器外科

塚本修一, 矢野篤次郎

【目的】臨床教育の重要性が求められる現況下, 肺癌手術の周術期管理の標準化をめざす。【方法】早期離床・退院のためのベッドに拘束しない術後管理として術後酸素投与の是非, 鎮痛用硬膜外チューブの早期抜去, 術後間質性肺炎に対するステロイド予防投与の功罪について自検例をレビュー。【結果】術後の一律的な酸素投与は必要なかった。術中に開胸部の肋間神経を切断し, 硬膜外チューブを術後2日目に抜去したが, その後は非ス消炎鎮痛剤で十分に対処可能であった。術後間質性肺炎のリスクを有する症例に対する術直前メチルプレドニゾロン125mg投与は術後早期のみ抗炎症作用を示し, 負の作用は明らかではなかった。【結論】診療経験を文書化し(パス作成), 日々の診療をレビューし(エビデンス探求), 改訂していくことが周術期管理の標準化において重要である。

74. 女性扁平上皮癌の検討

国立病院長崎医療センター

中野浩文, 木下明敏, 山本和子
大角光彦, 辻 博治

1997年から2001年までの5年間に本院に入院された原発性肺癌276例中, 扁平上皮癌は70例(26%)で, うち女性は5例であった。【症例1】64歳。喫煙40本/日×44年。検診発見。PS2。右S²末梢。右上葉切除(pT2N0M0)。再発にてCDDP+VDS施行。2年1ヶ月癌死。【症例2】75歳。喫煙歴なし。主訴は咳嗽。PS2。左肺門。cT4N0M0。骨転移巣出現。12ヶ月癌死。【症例3】74歳。喫煙10本/日×40年。重度の糖尿病で入院治療中に, 左S⁶末梢腫瘍。PS3。cT3N2M1。BSC。8ヶ月癌死。【症例4】60歳。喫煙40本/日×37年。PS1。左肺門部。左上葉切除(pT2N1M0)。術後断端部の再発認めCPT11+CBDCA施行。4年4ヶ月癌死。【症例5】63歳。喫煙歴なし。転移性脳腫瘍摘出。CBDCA+CPT11施行。1年1ヶ月生存中。女性扁平上皮癌例の発見動機, 発生部位, Stage, 喫煙歴,

予後などについて圧倒的に多い男性例と比較検討を行う予定である。

75. 当院における肺癌症例の検討
泉川病院外科

久松 貴, 村岡昌司, 林田 謙
同 内科 佐々木英祐
泉川欣一, 原 耕平
長崎大学医学部第1外科

赤嶺晋治, 岡 忠之
肺癌検診は, その早期発見, 早期治療を目的として行われてきたが, 今日, 肺癌検診の方法, 有用性などについていろいろ議論もある。一方で, 最近ヘリカルCTによる検診も導入されつつあり, より一層の検討が必要と思われる。私たちは過去15年にわたり住民検診, 医療機関等において発見された原発性肺癌約204例を経験しており, 今回これらの症例に臨床的解析と予後調査を行ったので報告し, 加えて当該地域における肺癌検診の有用性についても若干の考察を加え, 報告したい。

76. 当科における最近10年間の肺癌外科手術例の病期, 予後の解析
熊本大学医学部呼吸器内科

岸 裕人, 松本充博, 岡本 勇
興裕博次, 菅 守隆, 佐々木裕
国立療養所再春荘病院

森山英士, 河野 修
当科で診断及び治療を受けた肺癌患者のうち予後が分かっている患者を対象として, 最近5年間(平成10年4月から15年3月まで)とそれ以前(平成5年4月から10年3月まで)について, 肺癌外科手術例の予後, 病期の解析をした。解析可能な肺癌患者は451名(最近5年間:304名, それ以前:147名)のうち外科手術例は177名(最近5年間:126名, それ以前:51名)であった。肺癌患者全体では5生率は29.8%(MST:41.1ヶ月)で, 外科手術例では5生率は67.7%(MST:78.6ヶ月)であった。病期別では最近5年間はIA期54例(外科手術例の42.8%), それ以前ではIA期18例(35.3%)とIA期が増加傾向にあった。最近5年間では外科手術例の割合が増加し, 5生率76.5%でそれ以前では5生率54.9%と予後の延長が認められた。

77. 小型肺癌(2cm以下)切除例の